

視聴報告～選挙期間中「立憲民主党上げ報道」ほどの程度あったのか

この度の衆議院解散総選挙において、立憲民主党を持ち上げる報道が目立ったという意見が多く聞かれました。そこで、実際にどのような報道があったのか、当会スタッフがこれまで確認できた事例について検証しました。

1. 日本テレビが報じた「枝野フィーバー」

10月19日夕方の報道番組「news every」において、「投票まであと3日 与野党の党首が訴え」と題して、各党首の動向を伝えました。

その中で、立憲民主党を異常に持ち上げたVTRが放送されたとして、ネット上で批判が起きています。確認してみると、確かに立憲民主党の枝野代表の「人気ぶり」を過剰に強調した報道と言わざるを得ないものでした。また、日本テレビでは類似のVTRを同日深夜帯のNEWS ZERO、翌20日早朝の「Oha!4 News Live」、朝8時からの「スッキリ！」でも放送していました。それぞれの編集の違いについては後述します。

■10月19日夕方の「news every」における報道のうち、立憲民主党について伝えた場面の内容は以下のようなものでした。

(希望の党の苦戦が伝えられ、対する自民党は堅調な中「低姿勢を貫いている」ことなどを伝えた後)

ナレーション：一方、健闘が伝えられているのが立憲民主党。それを支えるのが、枝野代表の人気ぶりです。

枝野代表（今月14日東京・新宿での街頭演説）：「自分の権力のもとになっている憲法を自ら守らない、これでは権力の正当性がありません。」

ナレーション：この日詰めかけた聴衆は、二つの階段をびっしりと埋め尽くすほど。陸橋の上にも、大おお勢の人が詰め掛けました。そしてエ（語尾上がる）

聴衆：「枝野！枝野！枝野！枝野！」

ナレーション：聴衆からは、枝野コールが鳴り止みませんでした。

枝野代表を写真に収めようと、スマートフォンを掲げる人もたくさん。

さらに、「枝野フィーバー」は全国へ。（演説する枝野氏の映像の右下に“枝野フィーバー”と

いうテロップ)

(今月 15 日、大阪・高槻市) 握手して回る枝野氏に、中高年女性らしき声：「枝野さんかっこええ〜」「かっこいい〜」

ナレーション：大分でも。

(きょう、大分・別府氏) 握手して回る枝野氏に、中高年女性ら：「頑張って！頑張って！」車の中で食事をとる枝野氏：「正直言って想像を超えて好意的に、大きな反響をいただいているのは、うれしい誤算です。」



■以上が立憲民主党の枝野代表の動向を伝えた場面の内容です。一方で、自民党の伝え方はどうだったでしょうか。

(希望の党の小池党首が「森友・加計問題」に言及する演説をしている様子などを伝えた後) ナレーション：対して、優勢が伝えられる自民党は。

(きょう、奈良・生駒駅)

記者：(静かな声で)「雨の中ですが、安倍総理が来るということで大勢の人が集まっています」

ナレーション：今日、応援演説のため近畿地方を回った安倍総理。今回の選挙戦では、“低姿勢”を貫いています。京都での演説では、他党批判を抑え、ひたすら政策を訴えました。

安倍総裁：「子どもたちの笑い声が満ちあふれる、そういう未来をつくって行かなければなりません。大きな投資のために私たちは、消費税の使い道を思いきって変えていきます。」

ナレーション：7月の都議会議員選挙の時には・・・

(今年7月、東京・秋葉原。安倍総裁の演説にヤジを浴びせる人々)「安倍やめろ！安倍やめろ！」

安倍総裁：「こんな人たちにみなさん、私たちは負けるわけにはいかない！」

ナレーション：安倍やめろコールをする人たちを、“こんな人たち”呼ばわりする場面もありましたが・・・



(今日、四方に頭をさげる安倍総裁) 強気の姿勢は鳴りを潜めています。(画面右下に“強気な姿勢 封印”)



ナレーション：その背景には。

官邸関係者 (声優の声で)：「堅調なのを外に悟られないようにしよう」

ナレーション：自民党の選挙戦略も見え隠れします。



以上が自民党の安倍総裁の動向を伝えた場面の内容です。

(検証者所感)

この報道は、立憲民主党の枝野代表の「人気ぶり」をことさら強調する特異なものだったと

言えると思います。「枝野フィーバーは全国へ」などといった言い方は、ほとんど立憲民主党を宣伝するプロパガンダのようです。これでは、バンドワゴン効果（人気が集まっていると思われたところにさらに人が集まっていく効果）を狙った報道と見られても仕方ありません。

一方、自民党の伝え方は、立憲民主党の伝え方と比較してみると、そのネガティブぶりがわかります。

例えば、編集次第では、安倍総裁が聴衆とハイタッチする場面や、スマホをかざして安倍総裁の写真を撮る人々、安倍総裁への応援の声などを集めるのは容易でしょう。しかしこの報道では立憲民主党の枝野代表に対して、その「人気ぶりを」ひたすら強調する編集を行う一方で、自民党に対しては、今回の選挙の映像ではない「安倍やめろ」コールをした集団の場面を加えるなどしています。

従来の選挙報道では、各候補や党首の訴えを伝えても、聴衆の反応などは特に伝えないのが通常であり方であると検証者は認識していました。候補者の訴える政策など以外に、有権者に予断を与えるような情報はあえて伝えないことは、選挙戦の公平さを保つために必要な配慮であろうと考えていました。

しかし、7月の都議会選挙の報道で、自民党・安倍総裁の「こんな人たちに負けるわけにはいかない」との発言を批判する報道が繰り返されて以来、そうした配慮は無くなってしまったように思われます。

せつかく 6 分半も時間を取って選挙戦を伝えるのなら、各党党首の訴える政策などを、それぞれの声でそのまま伝えるような報道の方が望ましかったのではないのでしょうか。

なお、各党が取り上げられた映像の時間は以下の通りです（登場順。場面が複数に別れる場合は加算）

希望の党 88 秒(53+35)

自民党 90 秒 (83+7)

公明党 28 秒

日本のこころ 11 秒

立憲民主党 93 秒

日本維新の会 17 秒

日本共産党 20 秒

社会民主党 17 秒 (10+7)

この news every の報道の後、翌日朝にかけて類似の報道が3つの番組でありましたが、編集には微妙な違いがありました。以下に、それらについて記します。

・10月19日「NEWS ZERO」

自民党の「低姿勢」戦略や「官邸関係者」の言葉を伝えていること、7月の都議選での「安倍やめろコール」を取り上げている点など多くが news every と共通しますが、「やめろコール」への安倍総裁の反応について「こんな人呼ばわり」という表現ではなく「声を荒げるシーンも」と言うなど、若干おとなしい表現になっています。また、安倍総裁が聴衆とハイタッチする場面も見られました。

立憲民主党については、冒頭に「健闘」ではなく「躍進」という言葉を使っていました。流れは news every と同様ですが、「枝野フィーバー」という言葉は使いませんでした。

・10月20日「Oha!4 News Live」

VTR の構成は「NEWS ZERO」と同様でしたが、公明党、日本のこころ、立憲民主党、共産党、社民党が紹介される間、連続して画面右上に「公明代表替え歌♪で牽制 立憲民主“枝野コール”人・人・人」と表示されていました。(希望の党と自民党の場面では「小池氏厳しい質問に“笑顔” 安倍首相はひたすら“低姿勢”」と表示)

・10月20日「スッキリ！」

安倍総理のハイタッチの場面は再び姿を消しました。

立憲民主党の場面では、「枝野フィーバー」とは言わないものの、「枝野代表の人気ぶり」「枝野コール」といった大きなテロップが目立ちました。



*ちなみに、この前後数日の日本テレビの選挙報道もチェックしたところ、特に立憲民主党を持ち上げているような報道は確認できませんでした。この2日間4番組のVTRだけが異質なものだったのかもしれませんが。とはいえ、こうした報道は決して看過できないものではないでしょう。

2. 明らかな「立憲民主持ち上げ」コメント

・10月2日フジテレビ「グッディ」より

安藤優子氏（キャスター）「民進党のいわゆるリベラル、枝野さんを中心とする人たちが、立憲民主党という新しい党を作るということで決まりました。（希望の党に）私は行きません！と言っている人たちが、なぜか尾木さん、かっこよく聞こえてしまうんですが」

尾木直樹氏（教育評論家）「いや、かっこいいですね。なんか正義がそちらにあるみたいです。」

・10月3日テレビ朝日「羽鳥慎一モーニングショー」より

菅野朋子氏（弁護士）「特に立憲民主党、まあこれから色々細かく出てくるでしょうから、まあちょっと期待したいところではありますよね。私が気になっているのは例えば、立憲民主党の民という字が、一つ高いところにあったんですよ。おそらく国民が一番高く、一番大事っているう理念が現れているのかなと思って、非常に期待しているところではあるんですけどね。まあそれを見てからまあ、野党として、リベラルの受け皿としてできるのかどうか、っていうところはちょっと着目したいですね。」

・10月3日テレビ朝日「ワイド！スクランブル」より

水谷修氏（教育評論家）「立ち上げそのものよりも、枝野さん偉かったなあとね、枝野さんに感動しました。言いたいこと沢山あったと思いますよ、小池さんにも前原さんにも。それを飲み込んで、文句の一つも言わず。清い人なんだなあと、ちょっと感動しました。でも国民にとってはこれは良かったと思います。民進党自体がこれまで右から左まで、ごった煮状態でした。それが右と左が別れることになったんで、少なくともいわゆる改憲派、小池さんの“希望”もそうですし、自由民主党、公明もそうなんですが、それに対する護憲派の受け皿が、共産党、社民党だけではなくて、立憲民主党まで増えてきた。これは国民の選択肢を増やした、非常に今度の選挙にとっては良かった結果だと考えています。」

(検証者所感) 確かに立憲民主党ができたことで、理念的な対立構図がはっきりしたということは事実と言えるでしょう。しかし、「かっこいい」「感動した」「非常に期待している」などの感想は、一連の事実を見て有権者がそのように評価するとしたらもちろん自由ですが、テレビで選挙報道に携わる人自身がそうしたコメントを安易に発することは、有権者に予断を与える恐れがあるので、やはり慎重であるべきではなかったでしょうか。

3. 「筋を通した」発言について

10月2日のテレビ朝日「報道ステーション」では、この日結成された立憲民主党に候補者が50～60人集まるだろうと後藤謙次氏(ジャーナリスト・共同通信社客員論説委員)が予想した上で、以下のコメントを加えました。

「なお増える余地もあるんじゃないかと。と言いますのは『筋を通した』ということで、意外と地元の支持者たちの強い応援があるんだと、いうことでそちらに増える力が働いているんじゃないかと、こう言われているんですね。」

(検証者所感) この発言は、前述の2番組における「立憲民主上げコメント」とは性質が異なります。後藤氏はここで、自らが取材した事実として、「筋を通した」という支持の声があると伝えています。そうした事実が当時あったことは十分考えられることなので、この発言は事実報道の範囲内と言えるのかもしれませんが。

ただし、このような事実を多くの番組で繰り返し指摘された場合には、結果的に全体として「立憲民主上げ」の印象を与える報道になってしまう恐れもあります。

選挙報道はそれ自体が選挙結果に影響を及ぼす恐れがあるので、言論の自由を守りながらも、慎重な報道が求められるのは言うまでもありません。しかし今回は、各党、各候補の訴える政策を公平に伝える報道よりも、政局的な動向に焦点を当てた報道が目立ちました。二つの新党が相次いで結成されるなど波乱続きだったのも事実ですが、各局があまりにもそこに関心を集中してしまった感があります。そんな中で、上記のような不思議な編集や発言が出てきたのが今回の選挙報道でした。